

Spiritualism News Letter

2000
第 9 号
4月1日発行

スピリチュアリズム・ニュースレター

発行/スピリチュアリズム・サークル 心の道場 発行人/小池里予 〒441-3147愛知県豊橋市大岩町字火打坂18 TEL 0532-41-0537 FAX 0532-41-8257
ホームページアドレス <http://www5a.biglobe.ne.jp/~spk/>

どちらでもよいことに、いつまでも
関心を向けていてはなりません。

重要なものと、どちらでもよいもの

私達地上の人間にとって最も大切なことは、「魂を成長させる」ということです。地上人生の目的は、それ以外にはありません。この「魂の成長」を基準にして、私達の関心の対象は、大きく三つに分類されます。まず一つ目は、魂の成長にプラスとなる重要なものです。二つ目は、魂の成長に関係しない、どちらでもよいものです。三つ目は、魂の成長にマイナスとなるもの、間違っただけのものです。優れた霊界通信になればなるほど、その内容は魂の成長にプラスとなる重要なものだけに占められるようになります。それに対しレベルの低い霊界通信（チャネリング）には、どちらでもよいものが多く含まれ、単なる好奇心の対象といった傾向が強くなります。

どちらでもよいものとは具体的に言えば、心靈現象・交霊会・超能力・自分の前世・守護霊の身元・未来予知・予言・占い・運命鑑定・占星術・夢分析・夢占い・魔よけグッズ・お守りグッズなどです。また宇宙人・UFO・アトランティスやムーなどの超古代大陸文明も、どちらでもよいものです。

こうしたものへの関心は、それが単に軽い興味のレベルに止まっている限りは、魂の成長に特に大きな害を及ぼすことはありません。しかし、それが過度の関心・執着へとエスカレートしていくなれば、確実に魂の成長にマイナスの影響を与えるようにな

ります。霊的成長のために努力し、地上人生の苦しみに正しく対処するためには、「霊的真理」にしがみつような真剣さが必要とされます。すべてのエネルギーをそのための向ける姿勢が要求されます。どちらでもよいことに意識を向け、多くのエネルギーを費やすとするなら、最も肝心な内的努力にエネルギーを傾けることはできなくなります。それではかけがえのない地上人生が、無意味で無駄なものになりかねません。

現在のニューエイジや精神世界ブームにおける大きな問題点は、霊的真理から外れたもの、魂の成長とは無関係なものへの関心が強すぎるということです。せっかく霊的世界へ意識が向き始めたにもかかわらず、どちらでもよいことに過剰なエネルギーを注いでいるために、霊的成長という最も肝心な点がぼかされてしまっています。どちらでもよいものが、さも重要なものであるかのごとく錯覚されています。残念なことに、スピリチュアリズムの中にも、そうしたどちらでもよいものに多大な関心を向けている人々が見られます。

スピリチュアリズムにたどり着くことができた人々が、いつまでも意味のないものに関心を持ち続けていてはなりません。私達が高級霊に信頼される「良き地上の道具」となるためには、スピリチュアリズ

ムの中から、こうした不純物を取り除いて、真に靈的価値のあるものだけで心を占めるようにしなければなりません。魂の成長に何の益もないものへの関心は一刻も早く卒業して、大人の信仰者としての道を歩み出すべきなのです。いつまでも玩具おもちゃにこだわり、興味を持ってはなりません。

以下では、どちらでもよいものを一つ一つ取り上げ、それをスピリチュアリズムの「靈的真理」の観点から考え、整理してみたいと思います。

どちらでもよいもの（1）

— 交霊会・靈現象・超能力

ニューズレターを通じてこれまで何度も述べてきましたように、交霊会や靈現象は、いまだ死後の世界や靈の存在を信じられない人々においてのみ意味を持つのであって、すでにこれらの存在を確信している人々にとっては、一切必要のないものです。そうした靈的レベルに至っている人（時のきた人）が靈的真理に出会うと、直ちに高い世界を目指して靈的人生を歩み出すようになります。その人の関心は初めから「信仰実践」であって、交霊会や靈現象などはどちらでもよいのです。それは現象レベルのことが必要とされる段階を、とっくに卒業しているということです。心霊現象より心の成長や生き方に関心を持つということは、その人の「靈性」が高いことを示しています。

それとは逆に、いつまでも靈現象にとらわれ興味を持ち続けているのは、その人の「靈性」が乏しいことを示しています。靈性が開かれていないため意識が心の深いところまで至らず、表面的なことだけに関心が向いてしまうのです。もしこのレベルだけに止まるとするならば、せっかく靈的真理と出会ったという幸運を、自ら無駄にすることになります。私達人間は誰でも靈能力や超能力を持っていますが、大半の人においては肉体の支配力の影響を受け、そうした能力は奥に閉じ込められています。それがたまたま、人によって表面上にまで出せるようになっていくということなのです。そうした靈能力者・超能力者と言われる人々の多くは、地上への再生に先立って、自らその道を選んでいきます。

しかし靈的能力や超能力の有る無しは、その人の靈的成長度・靈的進化のレベルとは無関係です。靈性の劣る人格の卑しい人が、すばらしい能力を発揮することがあります。つまり靈能力も超能力も、さして価値のあるものではないということです。そうした能力は、神と人類の靈的向上のために用いられた時のみ価値を持つのです。遠い将来においては、地上人類の大半が靈能力・超能力を発揮するようになっていきます。

スピリチュアリズムに導かれ「靈的真理」を知った以上、交霊会・靈現象・超能力に対しては、それらを当然のものとして認める一方で、決して特別な関心を向けません。それが私達の正しい姿勢なのです。心を清く保ち、誠実な靈界の道具としての歩みを通じて高級靈の援助を受けられるようになることこそが、真に「最高の靈現象」と言えるのです。

どちらでもよいもの（2）— 自分の前世

これについては、すでにニューズレター5、6号（退行催眠と前世療法）で詳しく述べたので、ここでは簡単に触れますが、「自分の前世を知りたい」という思いの根底には、前世の自分が立派であったことを確信したいという“虚栄心”があります。前世にこだわる在り方は、魂の成長にとって何の役にも立たないどころか、大きなマイナスを引き起こします。今の苦しみや自分の内容（靈的レベル）は、これまでの前世で培ってきた結果であるということが分かれば、自分の前世が何であったかなど、あえて問う必要はありません。そうした外面的なことはどちらでもよいのです。今の心の持ち方だけが問題なのです。

退行催眠やリーディングによって知ることができると言われる前世像が事実でないことは、何度も述べた通りです。フィクションであっても夢がある方がいいという人には、どうぞご自由におやりくださいとしか言いようがありませんが、「靈的真理」が与えられた以上、いつまでも自分の前世探しに関心を向けるような幼稚なことをしてはなりません。

どちらでもよいもの（3）—— 守護霊の身元

自分の守護霊が誰なのかを知りたい、という人も多く見られます。シルバーバーチはそうした質問に対して——「あなたにも立派な守護霊がいて、導いてくださっていることが分かるだけで十分ではないですか。名前を知ってどうなるのですか」と一蹴しています。シルバーバーチのこの答えは、そのまま私達に向けての言葉でもあります。私達は守護霊に対して感謝の思いを持たなければなりません。そして必要な時には助力を求め、また寂しい時には慰めを求めるべきです。このように心情的に、自分から守護霊に接近していく努力が必要です。

しかし守護霊の名前や身元を知る必要はありません。守護霊が誰であるのかは、私達が死んで霊界に行けば明らかになることです。守護霊の身元に異常に固執する人の心の内には、守護霊が立派であることを通して、自分が立派であること、特別な人間であることを自慢したいという幼稚な“自己顕示欲”があります。そういう人は、自分の前世同様、守護霊にも歴史的な有名人であることを願うものです。ニューエイジでは、自分の背後霊がレッド・インディアンであることがステータスとして流行しましたが、これも守護霊の身元にこだわるのと同様に、霊的真理に対する無知と精神的な未熟さを示しています。

地上人の霊的進歩に見合った霊が守護霊になる、というのが霊的な摂理です。ゆえに霊性の優れた人には高い霊が守護霊になっているでしょうし、霊的に未熟な人にはそれ相応の霊が守護霊となっています。どの程度の霊が自分の守護霊であるのかは、自分の姿・心の内容を観察すれば、おのずと答えが出るはずで、間違っても「霊的真理」に出会った者が、前世や守護霊を知ろうとして、低級霊のからかいの対象になるようなことは避けなければなりません。

どちらでもよいもの（4）—— 予知・予言

将来の出来事を前もって知ることは“未来予知”として知られています。一般的には予知は霊能力や超能力によるもので、この後で取り上げる、占星術・各種運命鑑定術とは方法論において異なります。占星術や運命鑑定術には一定の確立したマニュアルがあり、これに基づいて将来の出来事を知ろうとするのに対し、予知の場合は、霊能者や超能力者の直感・靈感によって直接未来の出来事を知ろうとします。そのため靈感占いとかリーディングなどと呼ばれることもあります。本来の純粋な易占いや水晶占いなどは、もっぱら靈感や超能力によるもので、占い術というより、むしろ予知と言うべきでしょう。

先に述べましたが、未来予知という現象は現実に存在します。そして時には、かなり正確に未来の出来事を言い当てます。霊界では、地上への再生に先立って選択した人生の大枠や性格（地上の人物像）、あるいは行動パターンを総合的に考慮し、因果律の観点から、当人（地上人）の未来の方向性をかなり正確に予測することができます。それが霊能力者や超能力者を通じて地上に知らされるものが予知なのです。

しかし実際には、^{ちまた}巷で見られる予知・リーディングの類いは、ほとんどいい加減なものであり、人々の無知に付け込んだイカサマと言うべきものが大半です。まさに低級霊に絶好の暗躍の場を提供するものとなっています。高級霊が地上人の安易な好奇心にやられて、未来を知らせるようなことは決してありません。

もしも未来のことが分かると、人間は現在のことを疎かにするでしょう。なのに人間がいちばん知りたがるのは未来のことです！こうした傾向は間違いです。

（現象編・264）



—絶対に信じられない予言は、どんな場合でしょうか。
(質問)

一般の人々にとって何の役にも立たない場合です。個人的なことは、まずもってまやかしと思っ
てよろしい。

(現象編・265)

もちろん霊には未来のことが予知できることがあり、それを知らせておいた方が良いと判断する場合もあれば、高級霊から伝言するように言いつけられる場合もあります。しかし、将来のことを軽々しくあげつらう時は大体において眉唾物とみてよろしい。

(現象編・265)

ここでもう一度、地上人の“運命”について復習してみましょう。スピリチュアリズムにおける運命観は、「因果律」という神の造られた法則に基づくものです。私達の地上人生における大きな運命の枠組み(アウトライン)は、地上に生まれる前に自分自身で選択したものです。地上に再生する際の、「苦しみに耐えて悪いカルマを清算し、魂を成長させたい」という決意によって、地上人の運命の大筋は決定しています。出生前に自分が選択した苦しみ・困難は、人生上のいずれかの時点で必ず生じるようになっています。これが“宿命”と言われるものの実態です。そうした宿命をベースとして、地上のさまざまな要因(環境・性格・教育・習慣など)が加わり、現実の人生行路が決定していきます。

このように地上人生で遭遇する苦しみや困難は自分で選んだものですが、実際に地上に生まれ肉体をまとうようになると、霊的記憶は完全に失われ、自分自身が今の人生を選択したことさえ思い出せなくなります。そのため身に降りかかってくる困難を呪い、苦しみから何とか逃れようと策を巡らすこととなります。

「地上における苦しみは、実は自分自身で選んだもの」「苦しみは、自分の魂の成長にとって大きなプラスとなるもの」——こうした考えこそ、私達がスピリチュアリズムの霊的真理によって学んだ地上人生の処世訓です。霊的真理によって苦しみ・困難の本当の意味を知ったからには、今後の人生において何が起きようが、すべて前向きに受け止め堂々と歩いていけるはずで
す。自分の将来について何の不安もなくなるはずで
す。恐れるものは何一つ存在しません。地上人生で生じる出来事・困難は、心の持ち方ひとつで、残らず自分の成長の糧とすることが出来るのです。そして死んで霊界に行った時には、一切の地上的苦しみから解放され、喜びの時を迎えるようになるのです。

従って、自分の将来の運命を知る必要などどこにもありません。運命を知ろうとするのは愚かなことです。今この時、私達に必要とされるのは、自分の行為と考えを「霊的真理」にひたすら添わせることなのです。それ以外にはありません。私達にとっての最高の援助は、言うまでもなく霊界の人々によって与えられます。そうした助力を得られるかどうかは、その人間の心の内容が決定します。私達の心が「霊的真理」に一致すれば、守護霊や背後霊は思う存分、守り導き、力を与えることができるのです。

どちらでもよいもの(5)

— 占い・運命鑑定・占星術

霊的真理を知ることのなかったこれまでの人類は、必要以上に将来の運命に関心を持ち、不幸に脅えてきました。そして何とか前もって運命を知り、不幸を避けようと、さまざまな運命鑑定術・占いを生み出してきました。その中で最もよく知られているのは占星術です。また陰陽五行の原理に基づく四柱推命や、姓名判断なども広く知られています。占星術の中では、西洋占星術やインドの占星術、バビロニアの占星術がよく知られていますが、最近ではニューエイジの普及と並行して、古代マヤの占星術が注目されるようになってい
ま
す。マスコミや書籍等を通じて、こうした占いや占星術には驚異的な中率があるかのように宣伝されています。果たして、こ

れらは本当に人間の運命を正確に占うものなのでしょうか。スピリチュアリズムでは、どのように考えるべきでしょうか。

結論を言えば、占い・占星術の類いは一切必要ありません。シルバーバーチは占星術についての質問に、次のように答えています。

——占星術というのがありますが、誕生日が人の生涯を支配するものなのでしょうか。（質問）

大自然すべてが常に何らかのエネルギーを放射しています。従って当然、他の惑星からの影響も受けます。それはもちろん物的エネルギーですから、肉体に影響を及ぼします。しかし、いかなるエネルギーも、いかなる放射性物質も、靈魂にまで直接影響を及ぼすことはありません。影響するとすれば、それは肉体が受けた影響が間接的に魂にまで及ぶという程度にすぎません。

〈シルバーバーチ4・86〉

——たとえば2月1日に生まれた人間は、みんな同じような影響を受けるのですか……。（質問）

そんなことは絶対にありません。なぜなら靈魂は物質に勝るものだからです。肉体がいかなる物的影響下におかれても、宿っている靈にとって征服できないものではありません。

（中略）人間はあくまでも靈魂なのです。靈魂は無限の可能性を秘めているのです。その靈魂の本来の力を発揮しさえすれば、如何なる環境も克服しえないことはありません。もっとも残念ながら、大半の人間は物的条件によって靈魂の方が右往左往させられておりますが……。

〈シルバーバーチ4・87〉

惑星は物的存在です。それぞれに放射物を出しバイブレーションを発しております。しかし、あなた方は物的存在であると同時に靈的存在です。内部には、物的なものから受ける影響のすべてを克服する力を具えております。

〈シルバーバーチ4・88〉

——スピリチュアリズムを占星術と同類と見ている人がいます。そういう人達は、地上の出来事は星によって宿命づけられ操られていると考えています。（質問）

あなたの誕生日にある星が地平線上にあったからといって、その星によってあなたの生涯が運命づけられていると考えるのは間違いです。

（中略）占星術でいう惑星には確かに人体に影響を及ぼす放射性物質がありますし、人体に影響を及ぼせば靈にも影響を及ぼすことになります。しかし靈は絶対です。すべてに優るものです。ですから、いかなる恒星も惑星も星座も星雲も、人体に及ぶ影響を克服するその靈の威力を妨げる力はありません。

〈シルバーバーチ4・203〉

シルバーバーチは、このように占いや占星術をはっきりと否定しています。生年月日と運命の関係をきっぱりと否定しています。四柱推命術は、生年月日・時間から運命を割り出す最もの中率の高い推命術として、ここ20年ぐらいの間、日本やアジアで大変な流行を見ました。しかしシルバーバーチは、それを「靈的事実」の観点から完全に否定しています。またシルバーバーチは、天体が地上の人間に及ぼす影響についても、無きに等しいわずかなものであると断言しています。これは星の影響力が地上人の運命を支配すると考える“占星術”の全面否定です。

天体は全く人間に影響を与えないわけではありませんが、その影響力は、人間の意志の力と比べれば比較にならないほどの微々たるものであり、無視すべきものなのです。私達の決意・意欲・努力こそが、人生に決定的な影響を与えます。霊は本来、物質によって影響されるようにはなっていません。霊の力は、天体による物質的な影響を完璧に打ち消すことができるのです。占いや占星術は「霊的真理」に対する無知から生じたものです。人間が本来“霊的存在”であることを正しく認識できないところから編み出されたものなのです。

このように占い・占星術などは本来、必要のないものです。それは内容自体に正確性がないこと、めったに的中しない事実においても明らかです。たまたま事実と合っていることだけを大袈裟にとらえ、的中率が高いと言ったりしているに過ぎません。当たらない点を客観的に見れば、的中などは程遠いのが実情です。身びいきな視点から見れば、占星術や四柱推命術は、実に的中率が高いかのように解釈できる仕組みになっています。

こうした占いや占星術が遊びのレベルに止まっているならば特別な問題はありますが、もし、それをまともに信じ込み、左右されるようになるのなら、重大な問題となります。それでは、正しい努力の方向性が見失われることになるからです。私達にとって占いや占星術の類は一切不要であることを、もう一度確認しましょう。占いや占星術に対する関心は、きっぱりと捨て去りましょう。これからの人生を「高級霊の道具」として委ね、いかなる苦しみも、自分の魂の成長にとって必要なもの、ありがたいものとして前向きに受け止め、歩んでいきたいと思えます。

* “風水” について

天体・星の影響は微々たるものであり、従って、占星術は全く根拠のない取るに足りないものであることが明らかになりました。ところでシルバーバーチは、自然界が人間に及ぼす影響力については、かなり大きなものと述べています。太陽光線や大地（土）にはヒーリング・エネルギーがあり、これによって病が癒されること

を指摘しています。

シルバーバーチに言われるまでもなく、私達は自然界の影響力を日常的に体験しています。例えば、天候によって体調や精神状態（気分）が良くなったり悪くなったりします。また折りやすい場所とそうでない場所があることも、たえず体験しています。このように自然界に存在するエネルギーは、私達に影響を及ぼしています。

こうした自然界のエネルギーや影響力に注目して、それを世界観として体系化したのが中国の“気”の思想です。中国医学が体内におけるエネルギーの流れを基本としていることは広く知られていますが、そうした気の流れを自然界にまで適用させたものが、最近評判となっている“風水”なのです。風水は気思想に基づく中国の自然観と言えます。私達がよく耳にする家相や墓相などは、この風水から出たものです。風水には占いとしての強い一面があり、当然のこととして、その内容の大半は事実ではありません。しかし、人間が自然界のエネルギーによって影響を受けるという発想そのものは正しいのです。

自然界からの影響はまず肉体に及び、肉体から間接的に精神へ及ぶようになっていきます。それがひいては霊にまで影響を及ぼすということになります。しかし最終的に、それが“霊”にまで影響を及ぼすか否かは、本人の努力次第です。地上にいる人間は物質界から肉体への影響を受けると同時に、それを霊によってコントロールすることができるようにつくられています。霊を優位に保つ努力を通じて、肉体からの悪影響はコントロールできるようになっています。自然界・物質界からの影響に振り回されるのは、結局、霊的コントロールの努力を怠る人間にのみ当てはまることなのです。自然界の影響はあっても、霊主肉従の努力・霊的コントロールの努力のあるところでは、それがマイナスとなることはありません。



どちらでもよいもの（6）—— 夢分析・夢占い

夢はリアリティーをともなって私達に迫ってきます。覚醒時と同じような現実感がともなっています。夢の中で、私達はまさに別の世界の体験をしているとすることができます。そのため昔から夢占いや夢解きが行われてきました。夢は現代人にとっても、未知の世界・神秘的な世界であると言えます。

19世紀に登場したフロイトは夢を学問的な研究対象とし、彼独自の“夢理論”を打ち出しました。夢を分析することによって潜在している人間心理が解明されるとしました。これは現代版の夢占い・夢解きと言えます。現代人の中にも、夢の内容から、日常では隠されているさまざまな情報が得られると考えている人々がいます。スピリチュアリズムに係わる人達の中にも、夢に非常な関心を寄せる人々がいます。

夢には確かに心霊的世界に通じるような一面があります。しかし必要以上に夢に関心を持ったりこだわり過ぎると、いろいろな問題を引き起こすこととなります。それは退行催眠におけるフィクションの前世をまともに信じてしまうことや、占いが必ず現実化すると信じ込むことや、低級霊のからかいを全て真に受けてしまうのと同じような弊害を生み出すこととなります。

次に「霊的真理」に照らしながら、夢について考えてみましょう。

私達は一人の例外もなく毎晩“幽体離脱”して、あの世を旅行したり、縁のある人と会ったり、幽界でさまざまな教育を受け、活動しています。またいろいろな娯楽を楽しんだりしています。それが夢として自覚されることがありますが、そうした夢の場合は目覚めた時、実に心地よさを感じます。そして鮮明に思い出すことができます。また霊界において学んだこと、教えられたことが目覚めてから、すばらしいインスピレーションとして脳裏に浮かび上がってくることもあります。

目覚めと同時に離脱していた幽体は肉体に戻ることとなります。肉体の束縛を受けるということは、“脳”という小さな器に、大きな“霊的意識”を無理やり詰め込むようなものです。そのため睡眠中の

出来事を脳を通して（覚醒後に）思い出そうとすると、浮かんでくるのは変形し歪められた記憶の断片ということになってしまいます。ですから夢の内容が、そのまま霊界での体験ではなく、それはあくまでも部分的な名残といったものに過ぎないのです。これが夢の一つのケースです。

私達が日頃みる夢のすべてが、幽体離脱中の体験に基づくものというわけではありません。夢の多くは、潜在意識に蓄積した観念の反映であったり、潜在意識によるフィクションであったりします。昼間会った人が出てきたり、テレビで見た場面が再現されるような夢はほとんどがこのケースで、単なる想像的産物に過ぎません。退行催眠で、潜在意識がさまざまな情報を組み立てつなぎ合わせてフィクション・ストーリーをつくり出すのと同じようなことが、睡眠中に“潜在意識”によって行われるのです。

また高い所から急激に落ちるような夢を見ることがありますが、それは離れていた幽体が肉体の中に戻る時の感触です。また病気による肉体的な苦痛や、過剰なストレスによる精神的苦痛が反映して悪夢となることもあります。また前夜食べ過ぎの状態で眠りについたり、部屋の温度が暑すぎる時なども、肉体の悪いコンディションが悪夢を引き起こすことがあります。このように夢の原因は種々さまざまです。

さて、こうした夢を分析したり占いの手段とすると、とんでもない的外れをしでかすこととなります。夢に必要な以上の関心を向けることは間違いです。時には睡眠中に、霊界の霊によって近い将来に起こり得る出来事・事件の可能性を教えられることがあります。それを首尾よく覚醒後に思い出した時は、正夢であったとか、夢の予知が当たったということとなります。しかし、それはめったに起こることはありません。たとえ将来の出来事を予知する夢であったとしても、すべて霊的真理で整理し対処すれば、特に恐れたり脅えたりする必要はありません。

また時には、低級霊によって恐怖心が吹き込まれ悪夢がつくられることがあります。しかし夢はどこまでも夢に過ぎません。夢にどれほどリアリティー

があり死ぬほどの恐怖が迫ってきたとしても、現実ではない以上、それにとらわれてはなりません。悪い夢を見たから不吉なことが起こるといふようなことは決してありません。地上にいる以上、覚醒時における正しい心の持ち方、靈的真理にそった人生の姿勢がすべてなのです。いつまでも悪夢にうなされ不安感を拭い去れない時は、靈的真理を読んで心を整理し、平静さを取り戻すのです。また寝る前に背後靈に助けを求めるのもよいでしょう。「靈的真理」にしがみつくと姿勢と「守護靈」への一途な信頼があれば、悪夢の問題はすべて解決するはずです。

どちらでもよいもの（7）

— クリスタル・魔よけ・お守りグッズ

アニミズム・シャーマニズムの原初宗教では、呪術が大きな部分を占めています。世界各地の遺跡からは、太古の時代に呪術で用いられた品々や、それに関係した人骨などが出土しています。シャーマニズムでは、シャーマン（呪術師・靈媒）によってあの世のスピリット（靈的存在）との交信が行われ、また悪靈の働きを封じ込めるために、さまざまな呪術的儀式がなされてきました。そうしたシャーマニズム的な信仰習俗は、今日に至るまで“陰の宗教”^{めんのめん}として綿々と引き継がれてきました。現代日本社会に見られる、お札・お守り・しめ縄・清め塩などは、アニミズム・シャーマニズムに由来する魔よけグッズです。

一方、現代のニューエイジにおいては、クリスタルが大流行しています。大昔から、クリスタルには何らかの神秘的なパワーがあると信じられてきました。魔術の儀式や未来予知のために、クリスタル・水晶球が用いられてきました。ニューエイジはこのクリスタル・パワーに注目し、瞑想やヒーリングの際の小道具として重要視しています。ニューエイジャーの中には、クリスタルを常に身に付けている人々も見られます。クリスタルの流行は、ニューエイジのシャーマニズム的・神秘主義的傾向を示すものと言えます。



こうした種々の魔よけ・お守りグッズは、本当に低級靈を退けたり、幸運を引き寄せる力を持っているのでしょうか。卓越した力を持った靈能者や超能力者が、サイキックパワーを込めることによって、お守りグッズやお札・神像に、“魔”を退ける特別な神秘力を付け加えることができるのでしょうか。言うまでもないことですが、単なる物質に過ぎないこうしたグッズが“靈”を支配するようなことはありません。

ところが現実には、明らかに^{れいげん}靈験と思われるような現象が見られることがあります。クリスタルや魔よけのネックレスを身に付けるようになった途端に、急に運勢が良くなったとか、不幸がなくなったという話をよく耳にします。こうしたことが現実にあるために、多くの人々が大金をはたいてお守りグッズを買い求めるのです。

実はこうした靈験らしきものは、すべて靈界の低級靈によって引き起こされたものなのです。魔よけの威力を信じる地上人の思念が、こうした低級靈を引き寄せるのです。クリスタルやグッズに力があると信じる低俗な精神に付け入って、地上人をからかい、弄ぼうとします。^{もてあそ}低級靈はクリスタルやグッズそれ自体に感応するのではなく、それを信じる人間の間違った思いに感応するのです。低級靈は初め、わざと靈験があるかのような状況をつくり出します。そうして地上人の心をしっかり洗脳した後、時間をかけて翻弄し、最終的にその地上人を奈落の底に落とそうと謀ります。邪靈を避けようとして高価なお守りグッズを買ったことで、かえって低級靈を引き寄せるという皮肉な結果を招くのです。

スピリチュアリズムの「靈的真理」を手にした私達にとって、クリスタルも魔よけグッズも一切必要ありません。何の意味もない迷信として一蹴すべきなのです。どちらでもよいような玩具^{おもちゃ}にいつまでもすがりよるような、馬鹿げたことを続けてはなりません。スピリチュアリズムは「靈的事実」を人類に示すことによって、地上世界に延々と続いてきた魔よけグッズ信仰を、地上から一掃させようと働きかけているのです。

*地上の宗教的儀式の多くが、こうしたグッズと同じように、常に霊界の低級霊のからかいの対象となっています。儀式に特別な威力があるかのような盲信のあるところは、低級霊にとって格好の働き場所となります。宗教に必然的に付随するかのよう^{おとし}に思われている儀式には、特別な“霊的価値”はありません。スピリチュアリズムは、まさに一切の宗教儀式を不要とする信仰です。形式的な儀式には、何の価値も認めない信仰なのです。低級霊に働き場を提供するような宗教儀式など、むしろ存在しない方がよいと言えます。

高級霊が儀式の必要性を説かないのは、それらが人類の魂の成長と無関係であるばかりでなく、逆に低級霊に活動の場を与え、魂を貶めることになっているからです。霊能者が仏像や神像に祈祷するうちに神や仏が出現することがありますが、これは言うまでもなく低級霊による演出に過ぎません。

また宗教には、人間や場所を聖別化するためのさまざまな浄化方法があります。例えば、お払いをしたり、鐘を叩いたり、しめ縄をはったり、水や塩を撒いたりして、人間や場所を聖別します。神の前に出るに際し、身体を清め、場所を清めようとする^{おとし}ことは立派な心がけです。

しかし実際に浄化がなされるかどうかは、それに関係する人の「霊性」によります。清めとは物質的な次元のことではなく、どこまでも“霊的次元”のことなのです。水や塩は、聖なる霊の宿った物・汚れのない物の象徴として用いているに過ぎません。従ってどのような物的手段を講じても、それに関係する人々の霊的レベルが低ければ、その場所も建物も聖別化されないこととなります。高い心霊によってのみ、低級霊を追い払い、清らかな霊を招き入れることができるのです。

高級霊が臨むことができるのは、霊的に清められた場所に限られます。多くの人々が低俗な欲望を抱えて集まるような場所、特に御利益信仰の寺社やお参り場所は、低級霊にとって絶好の働き場となります。そのような霊気の悪い場所には、できる限り近づかないようにするのがよいのです。

今回は、どちらでもよいものとして七つ取り上げ考えてきました。次号では引き続き、宇宙人、UFO、超古代大陸文明（アトランティス・ムー）の三つを取り上げる予定です。



霊界における時間と空間について

ニューエイジの平行世界観の虚構

霊界は時間と空間がない世界？

よく霊界には時間と空間がないと言われます。この点において、霊界は地上世界と根本的に違っています。時間がないとするなら、過去も現在も未来もないこととなります。過去・現在・未来は一つであって、過去の自分も、現在の自分も、そして未来の自分も、同じ一つの現存在ということになります。そこには、今の私と未来の私が同時に存在しているのですから、当然、未来の予知は可能ということになります。

霊界に対する知識が普及するにつれ、現在ではこのような理解をする人が多くなっています。しかし結論を言いますと、今述べたような考え方は事実ではありません。「霊的真理」に照らした時、明らかに間違っています。“時間論・空間論”はスピリチュアリズムにおいても重要なテーマの一つです。もし時間論・空間論についての正しい理解がないところでは、先に述べたような間違った解釈がなされることとなります。実際に、スピリチュアリズムに係わる人々の中においてできえ、間違った時間・空間論が受け入れられています。多くのスピリチュアリストが、この点で大きく混乱しています。

天外伺郎氏の“時間論・空間論”の解釈

ここでは、典型的な間違った時間論・空間論の解釈を取り上げてみます。天外伺郎氏は科学技術評論家としてばかりでなく、あの世に対する造詣の深さで知られています。その天外氏は、『未来を開くあの世の科学』（祥伝社）の中で次のように述べています。

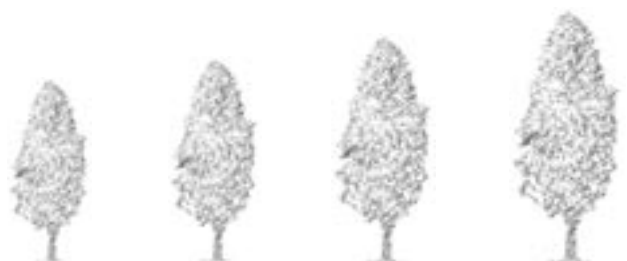
・「あの世」には、時間という概念が成立しないわけですから、いったん「あの世」に情報を取りに行って戻ってくれば、予知ということも可能になるはずで。 (62頁)

・「あの世」では、原因と結果を区別することが不可能であり、因果律そのものが成立しないということです。これも時間がないのだから当然です。連続した時間があるからこそ、原因とか結果があるわけ。 (中略)

前世・現世・来世をはじめとして綿々と続く輪廻転生の一つひとつの人生は、「あの世」ではすべて重なり合っているはずで。 (中略)

私は、カルマの法則というのは人間が自分で決めた約束事だと思っています。ですから「あの世」に行けばそういうものは一切ないけれど、「この世」に来たときだけあるというルールにしたのではないのでしょうか。 (63、64頁)

・この目に見えない宇宙、すなわち「あの世」とは、死んでから行くところではありません。 (中略)
つまり、われわれが活着しているときは、「この世」でも活着しているし、「あの世」でも活着しているという二重の宇宙の中で活着している。本当は二重ではなくて、ひとつの宇宙なんですけど、「あの世」というのは、普通の状態ではわれわれには知覚できないので、あたかも二重の宇宙になっているように感じられるわけ。 (118頁)



・つまり、時間がたたみ込まれているということは、死がないのです。ですから、「死後の世界」は「あの世」では定義できないのです。

「あの世」は死後の世界ではありません。死後の世界と言ったとたんに、そこには時間が入っています。死のうが生きようが、そんなこととは無関係に「あの世」は存在し、われわれはそこで生活しているのです。

死後の世界^{あやま}ということを考えること自体が過ちの原因なのです。(124頁)

以上は天外氏の言うところの「あの世観」の要約ですが、彼の考え方はすべて、霊界には時間・空間がないという前提から引き出されていることが分かります。あの世には時空が存在しないという前提から出発し、論理を推し進めています。そして最終結論として、彼は死後の世界である霊界そのものの存在を否定するに至っています。

天外氏はこの本の中で、彼の前著『ここまで来たあの世の科学』で死後の世界について言及したことを自己反省し、その時点では、まだ今のような考え方に気がついていなかったと述べています。すなわち彼は、前著を書き記した後に、「あの世と死後の世界は同じもの」と考えることが間違いであることに気がついたと言っているのです。彼がこのように前著の考えを変えるようになったのは、“ニューサイエンス”がきっかけであったとも述べています。天外氏は、こうした新しいあの世に対する見解は、ニューサイエンスが初めて明確に言い出したと語っています。



けいじじょうがく ニューエイジにおける形而上学

— パラレル世界観・多次元人間観

ニューサイエンスとは、言うまでもなく“ニューエイジ”の一部を構成する分野です。従来の科学に対して新しい科学的視点を提示することによって、人類に新たな知見をもたらそうというものです。ニューエイジに関心を持ったことのある方ならば、天外氏が述べた「あの世観」は、ニューエイジにおいて流行している「パラレル世界論」という、「ニューエイジ独自の形而上学」であることに気がつけられるはずです。(＊形而上学とは、感覚を超越した世界、形を知覚できない世界を探求する学問で、「神学」がその代表です。)

あるニューエイジャーは、この形而上学について次のように説明しています。

・形而上学の多次元論では、現在の自己が過去へ情報を流し、過去を変えることが可能になる。これによって現在も変化していく。現在の自己が、可能性未来にすでに存在する自己からメッセージを受けるということもできる。それが現在の選択に影響を及ぼすことになる。直線的輪廻の概念では、前世→現世→来世と順序だって進むようにとらえられる。しかし多次元論では、それらは全て多次元人格で、時空を超えて同時に存在するとも考えられる。

(桜井ゆみ『ニューエイジ・夢みる地球』277頁)

・未来も時間を進行して到達する地点とはとらえられなくなってきている。可能性未来として、すでに存在しているものとも考えられる。

(『ニューエイジ・夢みる地球』80頁)

こうしたニューエイジの形而上学は、多くのチャネリングの中にも色濃く見られます。日本人の間に一時期流行したチャネリングに、『バシャー』があります。バシャーとは、自称宇宙人である通信ソースの名前です。そのバシャーの通信の中にも、「パラレル世界観」と全く同じ内容が述べられています。

• 時間をあまり考えに入れる必要のない非物理次元の観点から見ると、過去・現在・未来は、すべて同じものとして捉えられます。皆さんが過去に生きた人生、現在の人生、そして未来に生きる人生、これらすべてが同時に起きているように見えます。皆さんの人生は重なり合っているのです。（中略）すべての過去世と未来世に加えて、どの人生においても、皆さんは同時に多数の人生を生きています。更に、並行した別次元での人生を同時に体験しています。これは物理的現実の中に限ってみても、皆さんは多次元な存在であるということです。

（『ニュー・メタフィジックス』ヴォイス社 142～144頁）

• 彼（チャネラー）は、私（バシャール）の過去世です。私（バシャール）は、自分の来世のチャネルなのです。（『バシャール』ヴォイス社 138頁）

• 私（バシャール）自身は、このダリル・アンカ（チャネラー）の来世からきた存在です。

（『バシャール』206頁）

* 『バシャール』については次回のニューズレターでも取り上げる予定ですが、バシャールと名乗る存在は宇宙人ではありません。バシャールによるチャネリング（霊界通信）の内容は、チャネラー（霊媒）であるダリル・アンカの潜在意識にある知識がトランス下で吐き出されたものか、あるいは単なる低級霊のからかいと思われる。ニューエイジで流行している「パラレル世界観」をダリル・アンカが自分流に解釈したものが、宇宙人からの通信として述べられているに過ぎません。

こうした形而上学は、今日のニューエイジにおける中心的思想の一つの柱になっています。この「パラレル世界論」という形而上学は、ニューエイジにおける際立った特徴の一つになっています。ニューエイジャーはこの形而上学を、人類史上初めて明らかにされた画期的なものと考えています。

スピリチュアリズムの観点からすれば、こうした世界観は明らかに間違っています。理解に苦しむ奇妙な空論としか言いようがありません。もっとも二

ューエイジャーに言わせれば、その奇妙さこそが、ニューエイジのすばらしさを証明するものということになるのですが……。

どこから奇妙な世界観が出てきたのか

—— パラレル世界観の形成過程

アメリカのニューエイジに蔓延するパラレル世界観という形而上学は、量子力学とチャネリングをきっかけにして形成されました。「パラレル世界」という言葉は、もともと現代物理学で言われたものです。パラレル多次元空間は、量子力学の基本方程式、シュレーディンガー方程式から導き出された数学上の仮説空間です。それはヒルベルト空間と呼ばれていますが、言うまでもなく、そうした空間は数学的にのみ考えられる理論上の存在に過ぎません。現実の存在世界ではありません。そのためニューサイエンスの旗手的存在と目される物理学者アラン・ウルフは——「実際、そんなもの（多次元世界）があるかどうか分からないが、数学上では可能である」と言っています。

ところがニューエイジでは、それを勝手に拡大解釈し、パラレル世界が現実存在する世界であるかのように言うのです。先に述べた天外氏も、まさにその一人と言えます。現代物理学の仮説であるパラレル世界論は、いつのまにかニューエイジでは、事実の世界にすり替わってしまったのです。

こうした事態が引き起こされた要因の一つとして、チャネリングの存在が考えられます。とくにアメリカの本格的なチャネリングの走りとなった『セス』は、形而上学の形成に大きな影響を与えたと言われます。セスのチャネリング（霊界通信）は、チャネリング界のバイブルのように言われてきましたが、その内容は、スピリチュアリズムの観点から見ても評価に値する深さと正確さを合わせ持っています。アメリカのチャネリングの中では、最も良質なものの一つとすることができます。

特に『セス』の優れた点は、アメリカにおいて初めて“類魂”の存在を説き、輪廻転生をこの類魂との係わりの中で明らかにしたことです。シルバークチと同様な再生観を、セスはアメリカにおいて初

めて述べたのです。セスは — 「現在のパーソナリティーは、我々の個々の意識より大きな意識のいくつかの側面に過ぎない」「個々の意識は、大きな意識の一部でしかない」「我々のパーソナリティー以外のたくさんの側面がある」と言っています。またスピリチュアリズムで言うところの類魂を、「多次元的な自己群 (multidimensional selves)」とか「集合実在 (a group being)」と呼び、それを独自のアイデンティティーをもった多次元的な自己群から成り立つ存在と説明しています。ここではインディビジュアリティーとパーソナリティーの区別が明確になされ、類魂ならびに輪廻・再生が正しく説明されています。

ニューエイジのチャネリングの中には、『セス』以外にも二、三の良質なチャネリング (ラザリス、ミカエルなど) があり、そこでは類魂についての正確な認識がなされています。

さて問題は、このように『セス』によって初めて明らかにされた類魂の説明が、ニューエイジでは正しく理解されず、それどころか大きくねじ曲げられてしまったことです。セスの語る — 「時空を超越した存在」とか「多次元的な自己群 (multidimensional selves)」などの概念は、勝手に歪めて解釈され、さらに物理学の平行世界と結び付けられて、奇妙な形而上学理論が作り上げられてしまいました。こうして出来上がった奇妙な“空想的形而上学”が、ニューエイジの中で独り歩きすることになってしまいました。

『セス』など良質のチャネリングにおいては、輪廻は、過去→現在→未来という一方向の流れの中でとらえられています。それが平行世界論では、あの世には時間がなく、過去・現在・未来は同時に多次元にわたって存在するというような、SF的世界に取り替えられてしまいました。過去の自分・現在の自分・未来の自分が同時に存在するというような、現実とはおよそ掛け離れた“輪廻転生観”が出来上がってしまいました。



* 霊界の界層 (階層) は、すべて一つの場に重なり合っ
て存在しています。これをパラレル世界・多次元世界と
呼ぶのであれば、それは正しいと言えます。しかしニュー
エイジで言われるパラレル世界とは、そうした意味で
はありません。

現在ニューエイジに流行している形而上学は、こ
のように物理学の仮説を勝手に事実と決めつけ、さら
に類魂についてのチャネリングの見解を歪曲して
解釈し、それらを結び付けた結果として出来上がった
ものです。二重の拡大解釈・歪曲から作り出され
た想像的産物に過ぎません。まさに空想以外の何
ものでもありません。もしパラレル世界論が事実で
あるとするなら、天外氏の言うように、死後の世界
である霊界は存在しないことになります。死後の成
長のプロセスも存在しないことになります。「霊性
の進化」という大事実さえ否定されることになりま
す。

どのように都合のよい解釈をしたとしても、死後
の世界としての霊界は厳然として存在しています。
あの世には因果律がないどころか、それは霊界のす
みずみまで行き渡り、すべての存在を支配していま
す。神の造られた法則である“因果律”は地上と霊
界の両世界にまたがり、誰一人としてその支配の及
ばない者はありません。すでに決定されている具体
的な未来などというものは、神の造られた世界のど
こにも存在しません。それは空論の上ではあり得て
も、霊界の現実として、そういうことは絶対はない
のです。霊界は空想の世界でも数学的に考えられる
仮想世界でもありません。厳然として存在する事実
の世界なのです。その事実の世界にあって、時の流
れが逆行することは決してありません。もしそれが
本当なら、霊性の永遠の向上というプロセスは成立
しなくなるのです。現在のあなたは未来から来た存
在であるなどという馬鹿げた話は、空想の上でしか
存在しません。言うまでもなく、未来の自分にコン
タクトすることによって、未来予知が可能になると
いうこともありません。

* “予知”という現象は実際にありますが、それは、すでに存在している未来の自分にコンタクトすることによるものではなく、別の方法によって可能になるものです。肉体を脱ぎ捨て、靈的能力を発揮するための制約が少なくなったあの世の靈においては、(成長のための環境を自ら選びとった)地上人の未来は、おおよそ見当がつくのです。本人の性格・環境などの諸条件と因果律の靈的要素を総合して、未来に起こり得ることを予測するのは、ある程度まで可能になります。本人の将来において実現される可能性を、かなり正確に推し量ることができるのです。それが予知の実際の内容です。

予知についてはこの他にもさまざまな複雑な要素があり、簡単に説明することはできません。いずれ別の機会に取り上げることになります。とりあえずここでは、“予知”がすでに実現している未来を覗き見し、情報を引き出すことによってなされるようなものではないことを理解していただければよいでしょう。

スピリチュアリズムの“時間論・空間論”

ニューエイジにおけるパラレル世界観の間違いは明らかになりましたが、スピリチュアリズムにおける「時間論・空間論」はどのようなものでしょうか。靈界には時間・空間がないということになれば、それはどのような世界として考えたらよいのでしょうか。もし本当に時間と空間がないとするなら、現在・過去・未来は同一のものと理解しても、間違いではないように思えます。幸いなことに、シルバーバーチはこうした問題に対する重要な手掛かりを与えてくれています。シルバーバーチの言葉を引用しながら、靈界における時空の問題について考えてみましょう。

シルバーバーチも、靈界には時間というものがないと言っています。しかし、それをそのまま文字通りに受け取ると、これまで述べたような間違いをしでかすこととなります。まともな理性の持ち主ならば、とても納得できないような奇妙な結論にたどり着くことになってしまいます。

時空の問題について正しく理解するためには、シルバーバーチが述べている、次のような言葉に注目しなければなりません。

こちらには、あなた方がお考えになるような時間がないのです。

(シルバーバーチ 5・48)

地上と同じ意味での時間はないのです。こちらでは靈的状态で時間の流れを計ります。言い換えれば、経験していく過程の中で、時の流れを感じ取ります。一種の精神的体験です。靈界の下層では生活に面白味が乏しいですから、時間が永く感じられます。上層界では——むろん比較上の問題ですが——快い活動が多くなりますから短く感じられます。

(シルバーバーチ 2・146)

このシルバーバーチの言葉から明らかにされるのは、靈界には地上のような時間はないということです。靈界には地上と同じような時間はないが、ある種の時の流れ、すなわち私達地上人が感じるような時間の流れに相当するものは、靈界にもあるということです。シルバーバーチは、あの世には時間が全くないと言っているわけではありません。地上のような時間はないと言っているのです。そこが重要な点なのです。

靈界に関心を持つ多くの人々は、靈界には時間の流れに相当するものさえも一切存在しないと思っ
ていますが、それは間違いです。そうした間違っ
た理解から、SFまがいの奇妙な世界観・形而上学を信じてしまうようになるのです。靈界にも、主観的な時の流れ、ある種の時間はあります。それなくしては、一切の因果律も、人類の靈的な成長・進化も存在しないこととなります。

シルバーバーチは、さらに次のように述べています。



— 霊の世界には時間はないというのは本当
でしょうか。 (質問)

私たちの世界の太陽は昇ったり沈んだりし
ませんから、夜と昼の区別はありません。従っ
てそれを基準にした時間はありませんが、事
物が発生し進行するに要する時間はありま
す。私も本日この場所へやってまいりまし
た。それには時間が掛かりました。

(最後の啓示・183)

このシルバーバーチの言葉から、霊界にも主観的
な時間の流れ・主観的な時の経過があることが明ら
かになります。また霊界には空間がないと言われま
すが、これも時間と同様に理解しなければなりませ
ん。すなわち地上のような空間はないということ
であって、主観的に感じる広がり、ある種の空間はあ
るということです。実際、霊界には山や海や川があ
ります。海で泳いだり、山を飛び越えたりして楽し
む霊もいます。このことは、地上とは違っていても
ある種の空間があるということを意味しています。

霊界では思うだけで離れた場所へ瞬間的に移動し

たり人と出会ったりすることができるなど、地上と
は時間や空間の在り方が全く異なります。だからと
いって、主観的に感じる時間や広がりがないわけ
ではありません。地上のような時間と空間がないとい
うこと、すなわち地上的な「時空」を超越している
ということなのです。

時間の流れがある以上、「パラレル世界論」で言
うような、現在・過去・未来が同時に存在するとい
ったことは決してありません。未来から現在に来る
というようなタイムトラベルは、SF小説の中では
存在しても、現実には存在しません。霊界において
も未来は決定されてはいません。未来の人間が、現
在のチャネリングで現れるというようなことはあり
得ません。もしそうしたことがあると言うなら、そ
れはすべて、インチキか低級霊のからかいである
と思ふべきなのです。

地上にいて、確定した時間と空間の次元の中に存
在するしかない私達には、霊界における時空を実感
を持って理解することはできません。霊界の「時間
論・空間論」は、私達地上人にとっては最も理解の
難しいものです。しかしそうであっても、数学的に
のみ存在する多次元世界観が、あの世での現実であ
ると思うような間違いだけはしてはなりません。



霊界ラジオは果たして可能か？ ITC（現代版霊界ラジオ）について

最近出版された、『あの世の存在に活かされる生き方』（徳間書店）についての質問が寄せられています。「その本には、電子機器を通じて霊界との交信が成功したと書いてありますが、本当でしょうか」といった内容です。

ITCとは、Instrumental Transcommunicationの略で、電子機器を用いたあの世との交信のことです。かつてはエジソンなどによって霊界ラジオの研究が進められましたが、ITCではラジオの代わりに現代の最新電子機器を用います。霊界ラジオについては、これまでスピリチュアリズムの中でもしばしば話題に取り上げられました。しかし現在に至るまで、霊界ラジオが成功したという事実はありません。シルバーバーチは、霊媒が存在しないところでの霊界と地上世界の交信はあり得ないと断言しています——「顕と幽の二つの世界の交信にとって不可欠の要素である霊媒に取って代る器具を考案中という話は聞いたことがありません。それは絶対にできないでしょう。なぜと云えば、二つの世界は霊と霊との関係、つまり霊性で結ばれているからです。」

（新たな啓示・125）

しかし、『あの世の存在に活かされる生き方』の中には、最近のITCの研究によって、地上でキャッチされたあの世の霊の映像が実際に掲載されています。それを見た人々は、人類はとうとう電子機器を用いて霊界との通信を可能にするようになった、と思われたはずですが。

シルバーバーチが言ったことは間違っていたのでしょうか。ITCは、霊媒の存在なしにあの世との交信を可能にしたのでしょうか。あの世とストレートに交信したいという人類の長年の夢は、本当に実現したのでしょうか。ITCの成功によって、霊媒は今後、不必要なものになるのでしょうか。結論を

先に言いますと、ITCにおいても、霊媒なしにあの世との交信をするという試みは、依然、成功していないということです。

以下、ITCにおける交信の実態を検証し、改めてあの世との交信における問題点を考えていきたいと思えます。

あの世の研究グループの存在

『あの世の存在に活かされる生き方』の中には、幽界において、地上との交信を研究しているグループの存在が述べられています。「タイムストリーム」と呼ばれるその研究グループには、千人以上の科学者が集まり、今もあの世とこの世を結ぶ交信についての研究を進めていると言います。その研究グループと地上の研究者がタイアップすることで、ITCの実験・研究が行われてきたと言うのです。

私達はすでに霊界通信を通じて、霊界には、地上人生で身に付けた知識・能力を活用して、地上と同じような研究を続けている多くの研究者のグループがあることを知らされています。そこでの研究は、ありとあらゆる分野に及び、心霊治療や今回のような地上との交信もその中に含まれています。

この「タイムストリーム」と呼ばれている研究者グループは、明らかにスピリチュアリズムの大計画の一部に組み込まれていて、末端の責任と任務を担っているものと考えられます。タイムストリームは、高次の霊の指導下で、スピリチュアリズムの一環としての研究を進めているということです。そのタイムストリームは、霊界の下層・幽界（アストラル界）に存在すると述べられています。（186～187頁）

地上近くの幽界には地上的要素が残っています。そこに住む霊達は、地上的感覚と地上時代の習性をそのまま死後に持ち越し、いまだに十分な霊的浄化

を果たしていません。地上時代に科学者だった者は、この世界では同じように研究生活に明け暮れることになります。そういう霊達はきわめて知的ですが、霊的には未熟なのです。こうした知的で未熟な霊達が、高級霊の指導の下で人類の進化に貢献する道を歩み、同時にそれを通じて、自らの霊的成長のための準備をすることになるのです。

さて、『あの世の存在に活かされる生き方』では、タイムストリームの中にエジソンやキューリー夫人、アインシュタインなども属していることが述べられています。しかし死後50年以上も霊界にいるエジソンやキューリー夫人が、今なおこうした幽界（アストラル界）に止まっていることについては、疑わしいと言わざるを得ません。もしそれが事実なら、エジソンもキューリー夫人も、低い霊性しか持っていなかったこととなります。あるいは、これらの研究グループに対する上位の指導者ということならば、そうした可能性はあると思われます。

また、タイムストリームの指導者（ディレクター）であるスエジェン・サルターについても、その身元に関する記述内容は全く信憑性を欠くものとなっています。低級霊のからかいとしか思えないようなことが述べられています。（23頁）従ってタイムストリームとして述べられているあの世の研究グループについては、それを文字通りに受け取るべきではありません。あの世と地上の交信を研究しているグループが幽界に存在するのは事実ですが、それがそのまま「タイムストリーム」であると思うべきではありません。



『あの世の存在に活かされる生き方』の問題点

『あの世の存在に活かされる生き方』の内容を検討するに先立って、この本全体を貫いている問題点を指摘することにしましょう。この本は、I T Cを紹介する目的で、二人のアメリカ人（パット・クビスとマーク・メイシー）によって書かれています。二人の著者は霊的世界についての豊富な知識を持っています。しかしそうした人間であっても、I T Cに関する大きな先入観から逃れられなかったようです。二人は、霊界ラジオやI T Cは霊媒がいなくとも成立する、霊界からのメッセージ・情報を直接キャッチできると考えています。そうした考えに立って、この本は書かれています。

彼らは次のように述べています——「今日、私達はハイテクの時代を迎え、人間の心を介さなくても彼ら（*霊のこと）からの情報を直接に受信できるような装置がついに誕生したのです。実際、霊媒の心を通じて交信しようとしても、情報が正確に伝わることはまれです。これは霊媒が自分の受け取ったことを翻訳している、つまり人間の心が元の情報にしばしば色づけしてしまうからなのです。」（178頁）

著者は、別のところで——「生まれつきにせよ訓練したにせよ、テレパシー能力の強い人は強力なコンタクト・フィールドを発生させることができるということも覚えておいてください。あなた自身や実験グループ中の誰かがこういった能力を持っていれば、早期の成功が期待できます」と述べています。（195頁）

これは明らかな論理矛盾です。先に自分の言ったことを、自分ですべて否定しているのですが、この本の中にはこうした論理矛盾が多く見られ、著者の考えが一貫していないことが窺えます。

結論を言いますと、霊媒がいなくとも交信が成立するという考えは、彼らの単なる思い込み・先入観にすぎません。I T Cが、霊媒（霊媒的地上人）の存在なくして成立すると考えるのは、彼らが先入観のメガネを通して現象を見てきたからです。彼ら自身が取り上げている事例を見る限りにおいても、

I T Cが霊媒的存在なくして成り立つものとは、とても思えません。これについては後程詳しく述べることにしますが、本書はこうした著者の先入観・偏見が土台にあって、その上でI T Cが紹介されています。従って、本書を好意的に読む読者に対して、I T Cは霊媒の存在なくして成立するものであるかのようなイメージを定着させることとなります。この意味で、『あの世の存在に活かされる生き方』は、正しいI T Cの紹介書とは言えません。

この本には、それに係わる地上サイドの人間の心の状態が大切なものとして述べられています — 「愛の気持ちを最大限に広げ、恐れをできる限り追い払い、否定的で不快なエネルギーを寄せつけないように努めなければならない。」(187頁) また他界の科学者達は — 「自分達のメッセージの受信状態は、エネルギーの振動である人間の思考によって重大な影響をこうむる」と警告しています。(26頁) なぜこれほどまでに、地上サイドの精神的状況・雰囲気とこだわらなければならないのでしょうか。

実は、地上人の心の状態が、あの世との交信に必要とされるエネルギーの供給を左右するからです。単に地上人サイドの精神状態がよければ、それで霊界からの通信が受信しやすくなるという程度の問題ではありません。地上人の精神状態が、交信システムそのものが成立するかどうかを決定するという重要性を持っているからなのです。それについては、これから順を追って説明していきますが、その点を示唆するような事実があるにもかかわらず、著者(パット・クビスとマーク・メイシー)はその本質を理解するまでには至っていません。まさにそこにこそ、霊媒の必要・不必要の問題を論じるヒントが隠されているのです。

I T Cにおいては、霊媒的存在が必要であるどころか、それなくしてはI T C自体が成立しないのです。霊媒の必要性は、霊界サイドの研究者においては常識的なものになっています。問題は、地上サイドがその必要性を認識していないことなのです。地上人の精神的状況と霊媒の必要性を関連づけて考えられず、全く別物としていることです。良い精神的

コンディションが交信には重要であることは認めても、それが霊媒能力のアップとの関係において認識されていないのです。そこから単純に、I T Cでは霊媒は不要との短絡的な発想へと進んでしまっているのです。

本書はI T Cについての紹介書でありながら、霊界サイドの研究者の見解とは異なった考えを述べています。このことが、読者に混乱と悪影響を与えることになるのではないかと気がかりです。もし著者の偏見が本書を通じて広まるとするならば、それは正しいスピリチュアリズムの普及にマイナスとなるかも知れません。

以下では、「霊媒の関与」という重大な問題点を中心にして、霊界ラジオとI T Cについて、考察・検討していきたいと思えます。

霊媒による二通りの交信形態

— 直接的交信方法と間接的交信方法

人類歴史の太古から現在に至るまで、あの世との交信は常に「霊媒」(チャネラー)を介してなされてきました。霊的能力のある人ならば、霊との直接交流は可能となりますが、そうでない一般の人々においては、霊媒に頼らなければなりません。霊媒こそ、霊界との唯一の“交信道具”だったのです。また霊界の側にも、自分が生きていることを何とか地上人に伝えたいと切望している多くの霊達がいま。そうした霊達にとっても、地上の霊媒は唯一の“交信道具”となるのです。

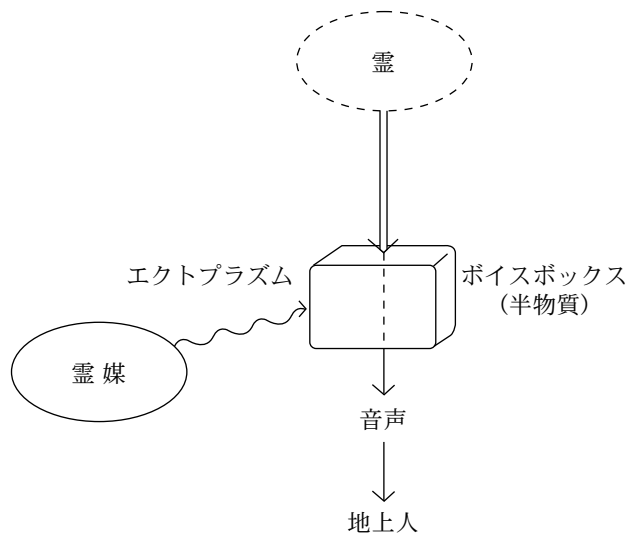
また現在、霊界・地上の両世界で進められているスピリチュアリズムの大計画においても、「霊媒」はなくてはならない存在です。霊界から地上人類にメッセージや教訓をもたらすことがスピリチュアリズムの目的ですが、それは全て霊媒を通して行われるからです。そのため霊界側では、地上的な影響を少しでも排除し、より純度の高い霊的真理を地上にもたらすために、優れた霊媒を求めてきました。

高度な真理・教訓を伝えるには、文字か言葉を使用しなければなりません。そのためスピリチュアリズムにおいては、霊による書記や談話が中心的な手段として用いられてきました。文字や言葉以外にも

インスピレーション（テレパシー）という方法があります。インスピレーションは高次の世界との交信には最も便利なのですが、それを地上の言語や表現に変換する際に、大きな問題を持つことになります。

文字や言葉を用いた霊界からのメッセージの伝達には、二つの形態があります。一つは、近代心霊研究において、直接書記や直接談話と言われてきたものです。直接談話（ダイレクト・ボイス）では、霊媒から供給された半霊的・半物質的エネルギー（エクトプラズム）を用いて、メガホンや発声器（ボイスボックス）を作ります。（図1）

（図1）直接談話のメカニズム



霊はこの発声器を用いて、直接地上人に語りかけます。とは言っても、それは簡単にできることではなく、肉体も声帯もない霊は、大変な努力をして地上時代と同じような声を作り出すのです。発声器（ボイスボックス）を通じて生前と同じ声が聞こえるため、霊はあの世でも地上と同じように言葉を使っていると思われがちですが、それはどこまでも、生前の声を真似て作り出した音声にすぎません。これらは全て地上人に身元を確認させるためにしていることなのです。しかし時には、低級霊が故人の声色こわいろを使って、地上人をからかうようなことが起こります。こうした直接談話は、死後それほど時間が経ってい

ない霊であればあるほど、やりやすくなります。霊界では地上のような言葉を使用することがないため、霊界での生活が長くなれば、その分だけ地上時代の声の再製は難しくなるのです。

霊の交信のもう一つの形態は、間接的に通信を送るというものです。霊媒の身体を用いての書記や談話で、一般にいう霊媒現象です。これは私達には身近な方法ですが、その仕組みは複雑で、ここでは詳細に述べることはできません。ただかいつまんで言えば、霊媒の“潜在意識”を支配することによって、霊媒の身体を自分の身体のようにコントロールし、オーラとオーラを融合させ、文字を書いたり話をするということです。

この場合、霊が「霊媒」をどこまで自分の道具として使いこなせるかが成功・不成功を決定します。こうした方法では、霊は、霊媒の持っている言葉や声帯を使うため、霊媒の母国語で話すことになり、音声も霊媒のものになります。霊媒が年寄りならば、その声も年寄りになります。スピリチュアリズムのような高度な思想内容を通信するためには、この方法が最もふさわしいのです。シルバーバーチやインペレーターインペレーターの通信が、こうした方法で行われたことは今さら言うまでもありません。

以上、わざわざ二つの「霊媒現象」の仕組みについて説明したのは、霊界ラジオが外見上は、直接的な方法（直接談話）に似ていることを確認していただくためです。直接談話（ダイレクト・ボイス）では、霊が発声器を通じて、直接地上人に話をします。霊媒の身体や声帯を介さずに、地上人に語りかけることにはなりますが、これは霊界ラジオと見かけは同じなのです。

霊界ラジオの目指したものは？

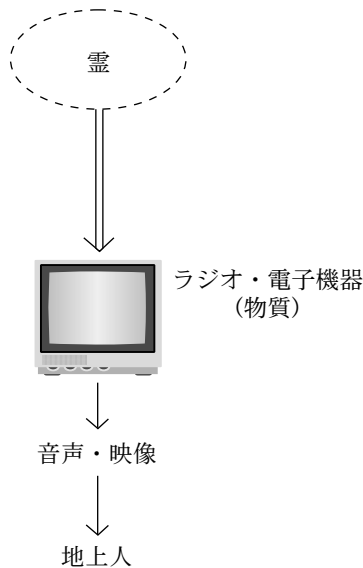
霊媒を通じて交信する場合には、霊媒のインチキ、霊媒の能力のバラツキ、低級霊の関与といったさまざまな問題が付きまといまいます。こういった問題があるため、「霊媒を用いないであの世との交信はできないものか」ということになりました。もし本当に霊媒を使わなくても、あの世の霊の声が聞けるとい

うことになれば、どんなに素晴らしいことでしょう。もしそれが実現するなら、誰もが霊界の存在を信じるようになるに違いありません。霊界ラジオは、まさにこのような発想から出発したのです。

直接談話では、霊→ボイスボックス（霊媒のエネルギーで作ったエクトプラズムの発声器）→音声、というプロセスが踏まれます。（図1参考）

一方、霊界ラジオでは、エクトプラズムの発声器の代わりに物質でできたラジオを用います。霊→地上のラジオ→音声、というのが霊界ラジオのプロセスです。I T Cも原理的には霊界ラジオと同じで、ラジオが電子機器に代わり、ラジオの音声にさらに電子機器による映像が加わります。（図2）

（図2）霊界ラジオ・I T Cのメカニズム（?）



霊と物質をつなぐ原理・この世とあの世をつなぐ原理

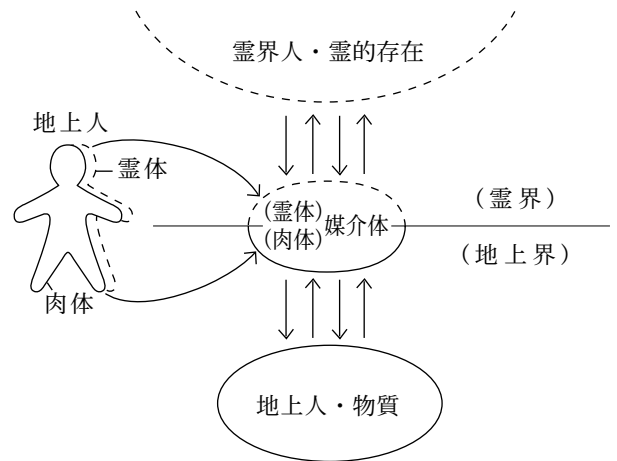
霊は、ストレートに物質に影響を及ぼすことはできません。逆に物質も、ストレートに霊に影響を与えることはできません。霊→物質、霊界→地上世界という、ストレートな流れは成立しないのです。

もし霊と物質の直接交流が可能ならば、霊界から地上に向けての働きかけは自由になり、その結果、地上世界はとっくの昔に天国になっていたはずですが。

しかし高級霊といえども霊である以上、物質世界に直接影響力を行使できないため、今日まで地上世界は悲惨な状態に置かれてきたのです。「顕幽の壁」があるために、スピリチュアリズムの展開において、霊界側は多大な苦勞を重ねてきました。こうした点から考えれば、霊からの通信を、単なる物質次元の道具であるラジオでキャッチしようという霊界ラジオの試みは、初めから不可能であることが分かります。

霊と物質の結び付き、霊界と物質世界の結び付きは、すべて地上の人間を媒介として成り立つようになっています。（図3）

（図3）霊界と地上界をつなぐ原理



地上の人間は「霊体」と「肉体」から成り立っています。私達の霊体は、霊的世界と同じ要素でできています。そのため霊的世界との交流を持てるようになっています。一方肉体は、物質世界と同じ要素でつくられているため、物質世界と関係をもち影響を及ぼし合えるようになっています。このように、地上の人間のみが、霊界と物質界という異なる二つの世界と係わりを持つことができるのです。地上の人間のみが、霊界と地上界をつなぐことができるということなのです。

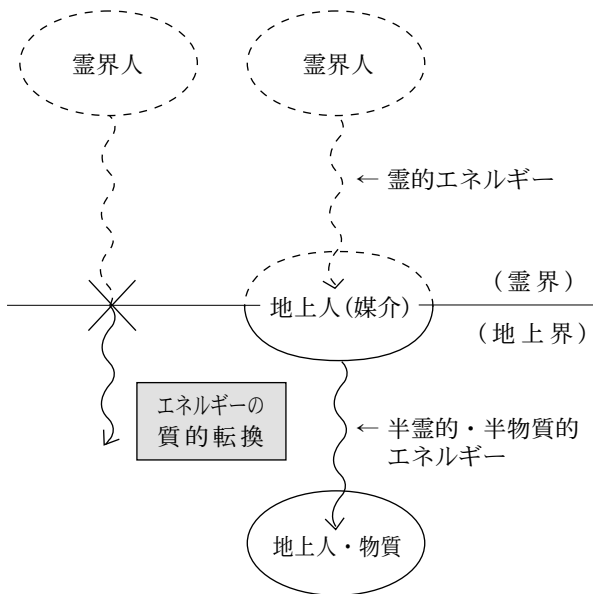
こうした事情があるため、霊界から地上に向けての働きかけは、常に地上の人間を媒介として進めら

れてきました。

いかなる高級霊であっても、地上の人間の存在なくして、地上に影響力を行使することはできません。どのような場合にも、霊→地上人（媒介）→地上世界（物質）というプロセスを踏まなければならないのです。これが霊と物質、霊界と地上世界を結ぶ鉄則なのです。霊媒だけが、霊界と地上世界をつなぐわけではなく、地上人の誰もが、本質的にはそうした立場に立っているのです。ただ霊媒と言われる人々は、霊界からの影響力をキャッチする感度が一般の人よりも高い、ということに過ぎません。

霊と物質の関係は、エネルギーについてもそのまま当てはまります。（図4）

（図4）地上人を媒介（通過体）とする霊的エネルギーの物質化プロセス



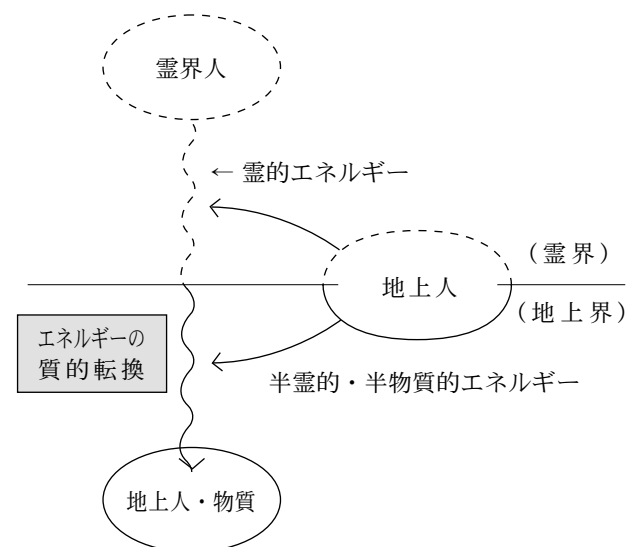
霊界から送られてくる霊的エネルギーは、そのままの形では物質世界にストレートに入っていくことはできません。霊的エネルギーはいったん地上人を通過することによって、半霊的・半物質的エネルギーに変換させられます。こうした「霊的エネルギーの物質化」のプロセスを経て、霊的エネルギーは地上にもたらされるようになるのです。

心霊現象における“エクトプラズム”は、半霊的・半物質的エネルギーの中でも、特に物質性の強いものです。霊的エネルギーの物質化のプロセスは、心霊治療の際にも行われていることは、あえて説明するまでもないでしょう。そして霊界ラジオも、こうした霊的エネルギーの物質化というプロセスがあって、初めて成立するものなのです。

霊界ラジオやITCには、地上人からのエネルギー供与が不可欠

いかに地上の受信装置が精緻であっても、物質である以上、霊的エネルギーをストレートに受け取ることはできません。いかに霊界の人々が絶叫しても、その声が、じかに物質に反応することはありません。『あの世の存在に活かされる生き方』の中には、事実、霊から送られてきたと思われる映像が映し出されていますが、これらはすべて今述べてきたように、霊的エネルギーが物質化された結果、もたらされたものなのです。地上の研究者がそれを認識しているかいないかにかかわらず、ITCでは、必ず「霊的エネルギーの物質化」というプロセスが踏まれています。（図5）

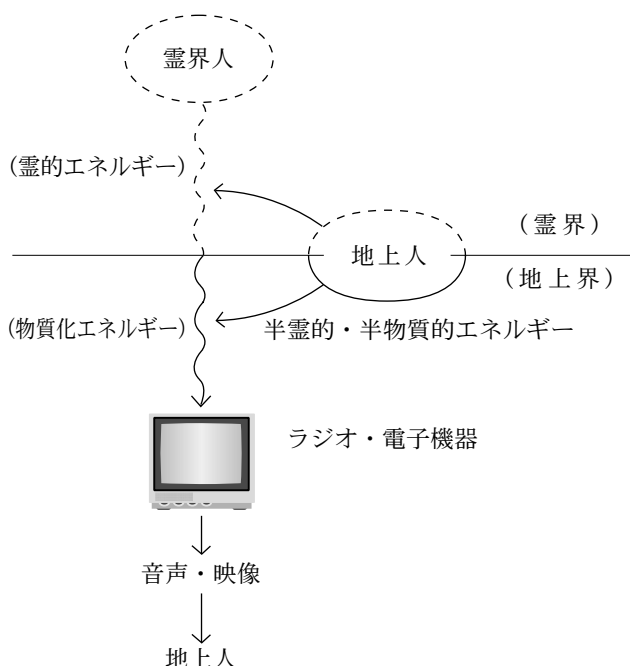
（図5）地上人からのエネルギー供給による霊的エネルギーの物質化プロセス



霊的エネルギーの物質化のためには、地上の人間から出ている半霊的・半物質的エネルギーが供給される必要があります。そうしたエネルギーを多く与えられる人が「霊媒」なのです。しかし、これは何も霊媒でなければならないというわけではありません。霊媒ほどではなくても、少しでも多く半霊的エネルギーを放出している人（霊媒的な要素のある人）であれば、誰でもよいのです。さらには霊的素質があまりなくても、そういう人達が集まって僅かずつでもエネルギーを出し合うような状況ができれば、それで役割を果たすことができるようになります。時には、ちょっと離れたところにいる霊媒体質者からエネルギーを持ってきて利用することもあります。エネルギーの供給は、こうしたさまざまな形で可能になりますが、最も効率的なのは、実験室に強力な霊媒がいて、十分なエネルギーを得られる場合であることは言うまでもありません。

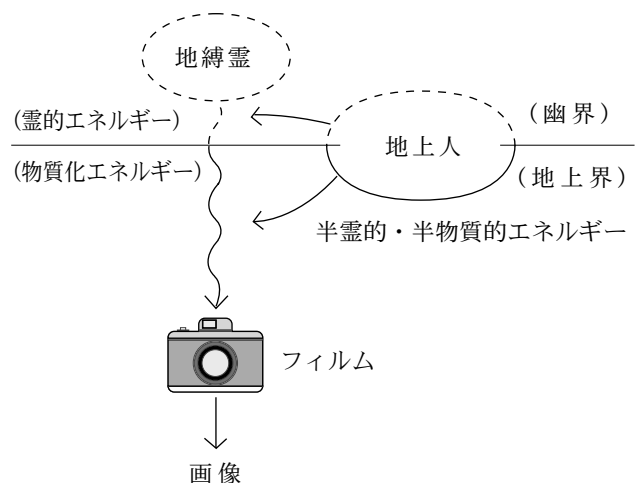
I T Cにおいては、このような状況下で霊の姿が映し出され、その声を聞くことができるのです。霊の発する霊的エネルギーが、地上人からの半霊的・半物質的エネルギーを受けて質的に変化し、ラジオから流される音声から材料となる音を拾ったり、映像を作るために機器に働きかけることができるようになるのです。（図6）

（図6）霊界ラジオ・I T Cのメカニズム



霊界ラジオもI T Cも、結局は、半霊的・半物質的エネルギーを供給する地上人がいなければ成立しません。直接談話（ダイレクト・ボイス）では、霊媒のエネルギーが半物質の発声器（メガホン、声帯、ボイスボックス）を作り、これを霊が用いて声を出しました。霊が直接発声器を使用できたのは、発声器自体が半物質の材料でできていたからです。（図1参考）もし発声器が純粋な物質でできていたら、霊はそれを直接使用することはできません。霊界ラジオやI T Cの場合は、霊から送られてくる霊的エネルギーがまず半物質化され、その後、物質的な道具に働きかけるという順番になっています。

（図7）心霊写真のメカニズム



*心霊写真は、I T Cによる映像化と同じメカニズムで成立します。（図7）

“地縛霊”が、近くにいる地上人やカメラを持っている本人から半霊的・半物質的エネルギーを吸収し、自分の体を半物質化することで、フィルムに反応ようになります。従って心霊写真ができるためには、エネルギーを与えることができる地上人（霊媒体質者・霊的体質者）が近くにいることが“絶対条件”となります。

心霊写真と念写では、メカニズムが全く異なります。前者はスピリチュアルなものであり、I T Cによる映像化と同様な仕組みで成立しますが、後者はサイキックによるものです。

スピリチュアルとサイキックの違いについては、今後のニュースレターで取り上げる予定です。

I T Cの実験は“交霊会”と同じである

スピリチュアリズムでは“交霊会”を成功させるために、参加者の心が一致して和やかな雰囲気をつくり出すことが重要視されてきました。参加者の心が一致せず、不調和なエネルギーが支配的な時には、質のよい交信ができなくなります。また部外者が突如参加したり、懐疑論者がいる時にも、交霊会のエネルギー状態に乱れが生じ、交信がしにくくなります。霊が通信を送るのに必要とされるエネルギーは、霊媒一人から摂取するのではなく、普通は参加者全員から少しずつ集められます。こうした事情があるために、通信を送る霊界サイドは、交霊会の参加者の心の持ち方や精神状態について、繰り返し注意を促してきたのです。参加者の精神状態が悪かったり調和を欠く時には、エネルギーの流れ自体が阻害されたり、粗悪なものになってしまいます。霊が働くための十分なエネルギーが供給されなくなってしまうのです。エネルギーの乱れが、高級霊を遠ざけ低級霊を引き寄せることとなります。このように交霊会の成功・不成功の鍵は、霊界サイドよりも地上サイドが握っている、ということなのです。

I T Cの実験においても、あの世サイド（タイムストリーム）から地上人に向けて、何度も高い心境が必要であることが語られています。もしI T Cが、霊から物質へ、霊界から地上世界へ、という単純なプロセスによって可能になるものならば、地上人の精神状態などは、交信とは一切無関係なはずです。結局I T Cは、地上人の心によって決定的な影響を受けるということなのです。

こうした現実には、地上サイドに「霊媒的存在」がなければ、I T Cは成功しないことを明らかにしています。霊界ラジオでもI T Cでも、より良い成果を上げようとするなら、心身の健全な霊媒を数名そろえることです。それが最も確実に霊界のメッセージを得るための方法なのです。地上の電子機器の性能を上げれば、それだけであの世との交信が強化されるといったものではありません。

このように考えてくると、I T C（最新の電子機器によるあの世との交信）は、本質的には従来の交霊会と全く同じであることが明らかになります。つ

まりI T Cは、「霊現象」の一つに他ならないのです。

I T Cの今後の課題 — 交霊会と同様の問題点の克服

I T Cが本質的には「霊現象」と同じであるということは、I T Cの実験には交霊会と同様の問題が付随することを意味しています。霊界の下層（幽界）には、地上に通信を送りたがっている多くの霊達があります。困ったことに、そうした霊達の大半が低級霊・未熟霊なのです。従ってI T Cも、そうした低級霊達の格好的になるということです。このことは、『あの世の存在に活かされる生き方』の中でも述べられています。（186頁）

霊界通信で、低級霊を排除する役割を担っているのが“神審者”です。当然のこととしてI T Cにおいても、こうした神審者の役割を果たす地上人が必要となります。それなくしては、あの世との交信はメチャクチャなものになってしまいます。交霊会では、神審者や参加者の霊的レベルが通信のレベルを決定しますが、I T Cにおいても全く同様のことが言えるのです。I T Cの現状を見る限り、通信霊の真偽や霊のレベルを見極めるには程遠いと言わざるを得ません。霊界通信では低級霊が身元を偽って頻繁に出現しますが、I T Cにおいても映し出された映像が、本当に霊界の本人そのものかどうかをチェックする必要があります。



こうした問題点をあげていきますと、果たして I T Cによるあの世との交信は必要なものかどうか、ということになります。I T Cの目的と存在価値について、よくよく考えなければなりません。交霊会は本来、死後の世界や霊の存在を信じられない人にとってのみ必要なものです。I T Cも、結局はそれと同じ目的において、はじめて意味を持つものなのです。I T Cを通して、これまでの「霊界通信」によってもたらされた以上の高度な交信が可能になるとは思われません。すなわち I T Cとは、従来の霊的現象や心霊治療、あるいは交霊会と同様に、死後の世界のあることを人々に知らせる一つの手段に過ぎないということなのです。I T Cはこれまでの交信と同じく、地上人からのエネルギーを受けながら成立するものであり、方法論の点から見ても特別に画期的な交信方法とは言えません。

I T Cの唯一の長所をあげるとするならば、I T Cでは直接談話（ダイレクト・ボイス）がそうであったように、一人の霊媒からの直接的な悪影響を多く受けずに済む、ということです。

霊媒は無くてはならない存在です。交信に必要なエネルギーは物的なものではありません。霊そのものから出ています。霊的身体から出ることもあります。いずれにせよ、必須の要素である愛がなくては、霊的なものを物的なものに転換することはできません。

〈新たなる啓示・126〉

もしも霊界と地上との交信のための純粋な通信機械ができたなら — そのようなものは作れません — それによって得られる通信は、美しさと尊厳さが失われるでしょう。

〈シルバーバーチ4・162〉

遠い将来、地上人の霊性が高まった時には、自らの霊的能力によって、誰もが霊界の人々と個人的かつストレートに交信できるようになります。現在ではきわめて一部の優れた霊通者のみが高級霊と交信できるだけで、将来においてはそうした人間が、ごく当たり前の存在となります。その時には、もはや霊界ラジオとかI T Cといった特別な機器も不要になります。霊媒という特別な媒介者も要らなくなるはずで

今の私達にとって最も必要とされていること、そして現在の地球上で最も価値ある生き方とは、単にあの世の霊と交信することではありません。それは、すでに高級霊によって示されている「霊的真理」を人生の指針として歩み、自らの霊性を高めること以外にはないのです。



皆様のご質問にお答えして

質問

今年1月17日は、阪神大震災から5年目を迎え、被災地では追悼集会が行われました。涙ながらに犠牲者の冥福を祈る遺族の姿を見ると、同情してしまいます。このように大震災で6千人以上の人々が同時に亡くなるということは、何か共通の原因があったためでしょうか。また多くの人命を一瞬に奪う大震災などの天変地異は、スピリチュアリズムの立場からどのように考えればよいのでしょうか。

答え

迷信深い人々の中では、よく“天変地異”が人間の行為やカルマと関係があるかのように言われてきました。神が、天変地異を引き起こして罪に汚れた人間を滅ぼすとか、地上人の悪行を懲らしめるために罰を与えるといったことが、信じられてきました。また狂信的な現代の新興宗教では、自分達に敵対行為を働いたために社会や国家に対して天罰がくだったなどと、勝手にこじつけて考えることもあります。天が味方をしてくれたお蔭で戦いに勝ったなどという言い方も、これと同じような考えに立っています。

結論を言えば、天変地異や自然災害を人間の行為・カルマと結び付けて考えることは、迷信・無知以外の何物でもありません。旧約聖書をはじめ地上の大半の宗教にはこうした傾向が色濃く残っていますが、それらはみな、人間がまだ「靈的真理」に無知であった時代につくられたフィクションに過ぎません。天変地異とは、地球という物質次元での活動に過ぎないのです。すべてが自然法則に基づいて引き起こされる物質的な運動や変化なのです。そして、それは人間の行為・思念とは一切無関係に生じていることなのです。

こうしたスピリチュアリズムにおける天変地異についての考え方は、不思議に思われるかも知れませんが、“唯物論者”と同じなのです。いつまでも迷信と無知から脱け出せない宗教者より、神や靈界の

存在を否定する唯物論者の考えの方が、スピリチュアリズムに近いのです。阪神大震災があつた地域に起こつたことは、その住人の行為やカルマとは何の関係もないことです。まずこの点をしっかりと押さえておかなければなりません。

さて、現実には被害に遭つた人々、特に親族を震災で亡くされた方々の心痛は、言葉に余るものと推察いたします。離れた所に住む人々も、自分達には難が及ばなかつたからといって、それを無関係な出来事として済ますことはできません。被災された方々に同情の気持ちを失つてはならないのは当然のことであり、できる限りの援助をすべきです。しかしスピリチュアリズムに導かれた私達は、それだけでよしにしてはなりません。自然災害によって人命が失われることは、一般の人々にとっては耐え難い悲惨な出来事です。誰もが何とか免れたいと考えます。そこには、“死”は人間にとっての最大の悲劇・この世の最大の不幸であるとの前提があります。しかしスピリチュアリズムの「靈的真理」によれば、死は悲劇ではなく、それどころか喜ばしい時の到来なのです。

従つて、自然災害や天変地異に対しての私達の見方は、世間一般の人達とは根本的に異なつていなければなりません。自然災害によって死ぬことを悲劇と考えてはならないのです。大震災で亡くなつた6400名の方々全員が、現在では、死によって地上の悲しみ・苦しみから解放されています。地上時代より多くの悲しみを味わい、苦しんでいるという人は、一人もいないはずで、全員があつた世に行つて、かつてとは比較にならないほど、楽しく喜びに満ちあふれた生活を送つて居るのです。災害の被害者について考える時には、すべてこうした「靈的事実・靈的視点」から見ていかなければなりません。

スピリチュアリズムの観点から言えば、本当は災害で死んだ人より、死別を悲しむ地上人の在り方こ

そ“悲劇”なのです。靈的事実に無知な地上人こそ、可哀想な存在なのです。政府の災害対策の甘さに不満を持つのは当然としても、それより遙かに重要視すべき問題があるということです。今回のような自然災害・天変地異について論じる時、結局は、人間が死後の世界について無知であることが、最も本質的な問題と言えるのです。

さらに大震災で亡くなった方々は、地上に生まれる前から予定されていた、“寿命”が尽きる時がきていたということを知っておく必要があります。もしその方々が大震災で死ななかったとしても、数年のうちに他の原因で亡くなることになったでしょう。しかし、ここで勘違いをしてはならないのは、震災のあった1月17日という当日が、彼らの全員が死ぬべき時として初めから予定されていたのではないということです。地上人は死を重大事と考えるために、多くの人々が同時に死ぬことを、必要以上に特別なこと・特殊なケースと考えがちです。しかし靈的な時間の観点に立てば、地上の時間の少々のズレ（数日～数カ月の違い）などは、無きに等しいものなのです。なぜなら靈的世界には、地上のような時間は存在しないからです。

「カルマの法則」は人間の靈的成長に関する法則であり、「靈的な時間・靈的な流れ」を基準にして考えなければならない問題です。従って、地上の時間で計る3日と3カ月は、靈界においては、全く同じ（違いがない）ことになるのです。死ぬべき時（寿命）は決まっているけれども、それを地上の時間の概念に当てはめた場合には、おおよその時が決まっているに過ぎないということなのです。そうした一人一人の寿命を土台にして、そこに地上のいろいろな要因によって決定される因果律的關係が加わり、それぞれの人生にさまざまなバリエーションが作り出されます。その結果、ある人々は大震災の当日、被災地で他界することになったということなのです。つまり震災の被害者は、寿命の尽きる時、死ぬべき時がきて亡くなったということなのです。飛行機事故やタイタニックのような海難事故で同時に他界する人々についても、同様のことが言えます。

「靈的事実」に照らした時、本当は、大震災である世に行った人々の冥福を祈る必要はありません。彼らは地上人が追悼集会などしなくとも、すでに靈界で楽しく過ごしているのです。真理を知ってみれば、気の毒に思う必要も、可哀想だと同情する必要もないのです。地上人が悲しみの涙を流すのは、実は後に残された自分を、自分自身で哀れんでいるに過ぎません。

また大震災の悲しみと悲劇を忘れないようにとの確認がなされたようですが、それも全く意味のないことです。物質世界での出来事は、時とともに風化し、忘れ去られていくのが自然の姿なのです。それでよいのです。本当の愛によって結ばれた人とは、靈界に行けば確実に再会できるようになっています。人間にとって最も大切な愛情は、靈界があればこそ、永続するようになっているのです。真実の愛の絆のあるところには、別離などないのです。

こうした「靈的事実」を知らないために、多くの人々は“死”を永遠の別れだと思い込み、悲しみを風化させてはならないと、自然に逆らったことを言っています。地上で行う追悼集会は、靈界の人々にとっては何の意味もない、おかしな行事に過ぎません。もし地上人が、あの世で生き生きと暮らしている人達の実態を見たならば、誰も追悼集会を催す必要性など感じなくなるはずです。常に「靈的視点」から物事を眺めるようにしたいものです。



※スピリチュアリズム・ライブラリー※

スピリチュアリズム・サークル「心の道場」では、スピリチュアリズム精選シリーズとして、下記の本を自費出版しています。

◆スピリチュアリズム入門 (169頁)
—スピリチュアリズムが明かす—「心霊現象のメカニズム&すばらしい死後の世界」

◆続スピリチュアリズム入門 (256頁)
—高級霊訓が明かす—「霊的真理のエッセンス&霊的成長の道」

◆スピリチュアリズムの真髄「現象編」 (297頁)
『The Mediums' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆スピリチュアリズムの真髄「思想編」 (357頁)
『The Spirits' Book』 アラン・カルデック編著／近藤千雄 訳

◆500に及ぶあの世からの現地報告 (437頁)
—エクトプラズムボックスを通じて明らかにされる死の直後の実生活—
『Life After Death』 ネヴィレ・ランドル著／小池 英 訳

◆マイヤースの通信—永遠の大道 (全訳) (271頁)
『The Road to Immortality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆マイヤースの通信—個人的存在の彼方 (全訳) (304頁)
『Beyond Human Personality』 G・カミンズ著／近藤千雄 訳

◆霊訓 (完訳・上) 『The Spirit Teachings』 (225頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

◆霊訓 (完訳・下) 『The Spirit Teachings』 (260頁)
ステイントン・モーゼス著／近藤千雄 訳

〈今後の出版予定〉

◆シルバーバーチは語る
『Teachings of Silver Birch』 (全訳) A. W. オースティン編／近藤千雄 訳

〈現在絶版となっている書籍の復刻予定〉

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『A Voice in the Wilderness』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Seed of Truth』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆シルバーバーチの霊訓 (仮題) 『The Spirit Speaks』
トニー・オーツセン編／近藤千雄 訳

◆ジャック・ウェバーの霊現象 『The Mediumship of Jack Webber』
ハリー・エドワーズ著／近藤千雄 訳

◆妖精物語 『The Loming of the Fairies』
A・コナン・ドイル著／近藤千雄 訳

“スピリチュアリズム・ニュースレター” について

このニュースレターは、これまでスピリチュアリズムを通じてご縁のあった方達に、一年間無料でお届けいたしております。皆さんのお知り合いで、お読みにになりたい方がいらっしゃいましたら、お知らせください。直接お送りいたします。バックナンバーをご希望の方もお知らせください。

これをお読みになって、どのような感想を持たれたでしょうか。どうぞ気軽にご意見をお寄せください。このニュースレターは、今後、3カ月に一度発刊する予定です。

なお、ニュースレターの発送については手違いのないように注意いたしておりますが、時期を過ぎてもお手元に届かない場合には、遠慮なくお知らせください。（現在のところ、1、4、7、10月の初旬に発行いたしております。）

